Seki Bridge Journal 第３７号 令和６年３月２９日 岐阜県立関高等学校

日本史授業及び部活動における郷土史資料の活用

林 直樹　岩田拓弥

はじめに　～探究科目導入にあたっての授業改善～

岐阜県立関高等学校地歴公民科では、新指導要領導入を機に、大幅な授業改善を行っている。具体的には、教員による一斉講義式の授業をとりやめ、グループによる議論と交流、グループ代表生徒によるクラス内での発表と情報共有を基本とするスタイルを導入している。

プリントやスライドの使用の有無等、担当教員によって手法に差異はあるが、①教科書・副教材を使っての予習を前提とした反転授業であること、②教科書掲載もしくは教員作成の論述問題に取り組み、グループ内で議論を深めること、③グループ代表がクラス内で発表を行い、情報共有すること、④章ごとの区切りに個人でレポートをまとめることを基本方針とした授業を行っている。

この方式は、新指導要領が導入された 2022 年度、1 年生全員が受講する「歴史総合」の授業においてはじめて実施した。実施にあたっては、事前に近隣の中学校の社会科教諭と情報交換を行い、中学校の実状を踏まえた上でのスムーズな中高接続をこころがけた。

「歴史総合」で扱う内容は、中学生にはなじみの薄い世界史の近現代分野が中心であり、入学直後の生徒が学ぶには障壁があるのではないかと危ぶんだが、予想以上に、意欲的に学ぶ姿が多くみられた。それには様々な要因が想定されるが、中学校で学ぶ社会科各分野、とりわけ、公民や地理の知識が生かされたことも一因と考えられる。

中高接続以外にも、授業進度や知識の習得状況等において、危惧される面があったが、授業進度は探究型の授業の方がむしろ早く、知識の習得状況に関しても、従来型の授業と比べて遜色のない結果が定期考査等で得られた。探究型の授業方式を導入したことにより、以前と比べ、レポート作成や口頭発表の力を養成し得たこと、グループ活動を通じ「協働的な学び」の姿勢が醸成できたことなど、プラスの側面が多かったと判断し、2023 年度以降も、この授業方式を継続し、さらに他科目の授業にも取り入れていくこととした。

2023 年度、2 年次において、日本史・世界史の探究科目（選択科目）が始まった。総合科目とは異なり、教科書もボリュームがあり、改定前よりさらに精緻な内容となっていることに、我々教員も驚いた。今まで以上に細かな知識が盛り込まれた教科書を使用した場合、果たして、思考力・判断力・表現力を身につける時間を捻出できるのか。疑念を拭い去ることはできなかったが、昨年度の「歴史総合」の実績と、生徒の潜在能力・可能性を信じ、当初の計画通り、探究科目もまた、生徒の主体性を前提としたグループ活動を軸に進めることにした。

本稿では、まず、筆者 2 名の担当している 2 年次「日本史探究」の授業展開を紹介する。その上で、郷土史の資料をいかに授業に取り込むか、その構想と実践について述べたい。さらに、郷土史に深い関心を抱く生徒が集まる地域研究部の活動についても言及する。

本校の立地する岐阜県関市は、刀剣をはじめとする打ち刃物の生産地として、中世から知られた地域である。隣接する美濃市は、和紙生産、美濃加茂市は中山道の宿場町として名高く、史跡や文化財に恵まれた地域である。身近な郷土史資料は、通学や帰宅の途中でも、校舎の窓からでも、触れることができる。郷土史資料の活用こそ、新指導要領の眼目である探究活動に最も適した教材と言える。

いまだ手探り状態ではあるが、以下に本校の取り組みを報告する。

一「日本史探究」の授業展開

（一）授業形態

2023 年度、筆者 2 名は、文系コース選択者の「日本史探究」を計 3 クラス（生徒数 65 名）担

当している。2年次は週4コマ、3年次は週2コマの授業を実施する。4月、旧石器時代から始まり、1月半ば現在までに幕末もしくは明治期の諸改革を取り扱っているところである。前掲の通り、従来型の授業と比べると授業進度は早い。その最大の理由は、教員が講義を行わないことにある。知識・技能の理解・定着は、原則、生徒が自身で実施するのであり、授業はその確認の場であると同時に、知識や技能を生かし、より高次な思考力・判断力・表現力を身につけ発揮する場として位置付けている。家庭での予習では、教科書・資料集のほか、オンライン学習サービスも利用できる環境を整えている。

授業中の教員の役割は司会進行と書記、助言であり、授業は生徒の主体的な行動によって成り立っている。

このような授業形態で、果たして十分な知識が習得できるのか。我々にも懸念があったが、定期考査はもちろん模擬試験でも、従来行っていた知識重視型の授業と遜色のない結果を得ている**（右写真：授業の様子）**。

（二）授業展開　～鎌倉政治史の場合～

50分の授業の中で扱う論述問題はおよそ2～3題であり、あらかじめノートに書きこんできた自身の答案をもとに、グループで議論し合う。さらに代表生徒の口頭発表を行い共有する。

以下に、生徒による発表事例を紹介する。「将軍と御家人の主従関係」「幕府と朝廷の二元支配」「式目制定の意義」「北条氏の権力掌握過程」等、鎌倉時代の政治史に関する生徒の発言をピックアップしたものである。

【事例一】院政も平氏政権も、その専制的な政治体質に批判が集まった。鎌倉幕府が、裁判制度の整備や式目制定の過程で、先例や慣習を重んじて公正性に配慮した背景には、専制政治への反省があったのではないか。
【事例二】皇室に連なる貴族である平氏や源氏と比べると、北条氏は地方の豪族出身に過ぎない。決して身分は高くない北条氏が、自らを権威づけるためにも、法典整備は必要だったのではないか。
【事例三】法典や歴史書を編纂する。摂関家や皇族を担ぐ。寺院を建立し鎌倉を都市として整備する。北条氏の政策を並べてみると、朝廷や京都をかなり意識しているといってもよいのではないか。
【事例四】北条氏の権力闘争のやり方はかなり汚い。将軍だろうが、頼朝の側近だろうが、敵と思えば容赦ない。初代の時政の時代からそうだった。その一方で公正な裁判とか法典整備とか合議制だとか、そんなことにも尽力する。あくどいことをやりつつも、気配りをして政治の安定を図ったのではないか。バランス感覚があると思う。
【事例五】政子が頼朝の妻となり、実家の北条氏を支えたことは、当時の家族制度のあり方から考えても重要なことだったのではないか。

立論の妥当性に問題があるとしても、教科書や副教材を頼りに、自身で考え、グループで議論を重ねた上での意見である。教員による講義を軸とした知識充填型の授業から脱却し、たとえ不十分であっても、自身が組み立てた歴史像を、仲間と共有した様子が、この文面からお分かりいただけると思う。

（三）長期休暇中の課題レポート

授業で身につけた様々な力を発揮する場として、夏季課題レポートを課した。「読書」「史跡・博物館探訪」「教科書深掘り」の3つの大枠からひとつ選び、具体的なテーマは自分で考えて決める。レポート執筆にあたっての要項は以下の通りである。

・題名、動機・目的、探究の過程、考察、振り返りの順に書く。
・本文800字以上。引用・参考文献明記。必要に応じて写真・図版掲載可。ワード横書きA4判で作成。データで提出。

・夏休み明けの課題テストで、自身の探究活動及びレポートを振り返る設問を出題予定。レポート内容が身についているか。自身の言葉で言語化できるか。確認する。

3 つの分野の中で、郷土史分野と関わりが深いのは、博物館や史跡見学のレポートである。地元の史跡や博物館を自転車や徒歩でめぐったり、家族旅行やオープンキャンパス、帰省などで遠出する際に立ち寄ったりと、まさに夏季休暇の探究にふさわしい。展示品や史跡など、高校生の心を動かす「ホンモノ」の迫力はもちろん素晴らしいが、それを受けとめる感性、思いを伝える表現力に感心した。以下に具体的な事例を紹介したい。

【事例一】教科書に登場する八角墳に関心を持った生徒が、自宅からほど近い古墳時代後期の方墳を訪ね、あらためてその価値に気付く。教科書の記載と郷土の歴史が結びつく瞬間である。
【事例二】家族の戦争体験をまとめたレポート。学徒動員、空襲、原爆投下直後の広島訪問…。個人の学びとしても、家族史の共有としても大切であり、資料価値も高い。
【事例三】読書分野では、建礼門院に焦点をあてた平家物語の読後感が光っていた。文学としての平家を読み込んだ本人が、歴史的実在としての平家をどう読み解くか。今後に期待したい。

このほか、教科書の深掘り分野も多彩であった。文字の出現と役割、古代仏教の発展、頼家暗殺、古墳出現、蒙古襲来、藤原氏の歴史、どれも興味深かった。その中でも、蒙古襲来が後世の日本社会に与えた影響を扱ったレポートは、着眼点の斬新さが際立っていた。

（四）地域と連携した郷土史探究講座

地歴公民科目の中でも、日本史の際立った特徴と言えば、郷土史資料の活用にある。史跡や埋蔵文化財、伝統産業等、関市を中心とした岐阜県中濃地域にも、数多くの郷土史資料があり、これまでも折に触れ授業の中で扱ってきた。

今回の新指導要領に基づく授業改善において、郷土史資料をどのように活用していけばよいのか。我々は、自治体の文化財担当者と打ち合わせを重ね、出前授業による郷土史探究講座を企画するにいたった。幸いなことに本校には、郷土史研究を精力的に行っている部活動、地域研究部があり、常日頃、自治体の文化財担当者の指導・助言の下、活動を行っている。建設的かつスムーズな雰囲気の中で、以下のような企画を行うことができた。

（１）古代のムラと官衙

関市の東隣に位置する加茂郡富加町は、702 年に作成された半布里戸籍ゆかりの地として知られる。同町内では東山浦遺跡をはじめとする同時期の遺跡の発掘調査も進められており、古代集落の様相を、文献と考古双方の資料から検証できる稀有な事例として名高い。

一方、関市には、7 世紀末から 10 世紀にかけての官衙遺跡、弥勒寺官衙遺跡群が所在する。郡衙をはじめ、地域首長の氏寺や居館、古墳、祭祀遺跡、瓦や須恵器を焼いた古窯が、相互に関連する密接不可分な遺跡群として、国史跡の指定を受けている。

2023 年 11 月 9 日、生徒の通学圏に所在するふたつの文化財に関し、富加町、関市それぞれの文化財担当者から、教室で説明を受けるという、郷土史をテーマとした出前講義を行った。担当は、島田崇正氏（富加町教育委員会）と森島一貴氏（関市文化財保護センター）である。

2 事例の文化財の説明と質疑応答を、わずか 50 分の授業の中でこなすタイトなスケジュールであったが、身近な地域の文化財と言っても知らない生徒も多く、郷土史を学ぶ良い機会になったと考える。**（上写真：郷土史探究講座の様子）**

生徒の感想を読むと、具体的な家族構成やムラのあり方、当時の社会構造にまで立ち入った話題が提供できる戸籍に対し、強い関心が集まったことが読み取れる。それに対し、集落にせよ官衙にせよ、スライド写真で発掘や遺構の持つ「面白さ」を、短い時間で伝えることは難しいと感じた。見せ方の工夫もいるだろう。今後の課題としたい。

（２）希望者対象のフィールドワーク

戸籍と官衙、二つの文化財に関し、さらに関心を持った生徒のために、文化財担当者による説明会を行った。

12 月 9 日、富加町郷土資料館において、半布里戸籍及び東山浦遺跡をはじめとする町内の遺跡に関する説明会を開催した。講師は島田崇正氏にお願いした。生徒 4 名、教員 2 名の参加ではあったが、出土遺物に触れる機会もあり、質疑応答も活発であった。

12 月 17 日、関市弥勒寺遺跡群において、森島一貴氏より説明を受けた。参加者は生徒 4 名、教員 2 名。官衙遺跡、弥勒寺（白鳳寺院）、池尻大塚古墳（横穴式石室墳）を順にまわり、遺構の説明はもちろん、研究史や文化財保護の意義についてもうかがい、こちらも質疑応答が活発に行われた。

（３）テーマ学習　～各社教科書の比較研究～

探究型の日本史授業が、思いのほか生徒間に浸透したので、思い切って、クラス全体でテーマ学習に挑むことにした。テーマは、日本史教科書の比較である。本校が採用している山川出版社以外に、実教出版、東京書籍、清水書院の計 4 社の日本史探究教科書を取り上げ、考古学分野に的を絞り、比較を行うことにした。

研究成果は次年度日本考古学協会総会高校生ポスターセッションにおいて発表予定である（仮題：学びたい歴史、学ぶべき歴史　日本史教科書考古学分野の比較研究）。

このテーマ学習は、比較的授業進度の早いクラスで実施している。生徒は、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代の 4 班に分かれ、それぞれの班内で教科書記載の比較を行っている。それと同時に、教科書のテーマ学習のページを参照に、自分たちの手で、授業で使用できる教材を作る試みも進めている。選んだテーマは「古代のムラと官衙」、題材は半布里戸籍と弥勒寺官衙遺跡群である。

半布里は加茂郡、弥勒寺は武義郡にそれぞれ所在し、所属する郡域が異なるが、隣り合う郡同士でもある。双方の資料を活用しつつ、岐阜県中濃地域を事例に、「古代のムラと官衙」について理解を深めていけるような教材をめざしているところである。あわせて、文献と考古、性格の異なる 2 種の資料を駆使しての歴史復元の面白さ、難しさについて考えることも課題としたい。末尾に設問も設けるが、「問いの表現」も生徒自身の手で作成する予定である。

二　地域研究部の活動

（一）過去の経緯

1948 年度、学制改革によって、本校が共学校として発足した頃からあった伝統の部活動である。戦後の風潮を反映し、平和運動などの社会問題に関心をもつ生徒が集まる部であったと聞くが、考古学に熱心な生徒の入学を機に、郷土研究の分野でめざましい成果をあげるようになった。その後、発掘調査や遺跡踏査、実験考古学等を中心に、70 年代前半頃までは活発な活動を行ったが、郷土研究クラブの活動が全国規模で退潮傾向を迎える 80 年代以降、本校においても、郷土史分野の活動は停滞したようである。

（二）今日の地域研究部　～地域の担い手として～

地域研究部において、郷土史研究が再び活発化したのは、2015 年度以降のことである。探究活動に関する国や県からの指定事業の開始により、学校全体がグローバル課題や地域課題について様々な取り組みを行うようになり、地域の歴史や文化、産業に関心のある生徒が、地域研究部に結集するようになった。結果として部活動が活性化し、各種コンテストでも上位入賞を果たすようになり今日にいたっている。以下にその事例を挙げておく。

・県出身の歴史学者・渡辺三三の在外研究（2018）全国高校生歴史フォーラム優秀賞・学長賞
・県出身作家江馬修の郷土研究（2019）日本考古学協会総会高校生ポスターセッション最優秀賞
・堅果類利用の実験考古学（2020）全国高校生歴史フォーラム優秀賞・学長賞
・歴史遺産を生かしたツアー提案（2021）全国高等学校郷土研究・社会科学発表大会優秀賞
・秘匿飛行場の調査（2022）全国高等学校郷土研究・社会科学発表大会最優秀賞

・岐阜県のトチノミ食調査（2022）「地域の伝承文化」に学ぶコンテスト優秀賞
・地下軍需工場の調査（2023）全国高校生歴史フォーラム優秀賞
・長良川流域のマガモ猟調査（2023）「地域の伝承文化」に学ぶコンテスト優秀賞

本校地域研究部の活動にはふたつの特徴があると考える。
ひとつは地域連携を基本とした研究を地道に展開することであり、もうひとつは研究成果をまちづくりにつなげていくことにある。もちろん純然たる学術研究のあり方を否定するわけではないが、 地域の協力なくしては高校生の校外活動は成り立たないし、学びの成果を地域と共有し、まちづくりへと生かす努力の中から、文化財の保全や活用に関する対話や知恵が生まれると考えるからである。
2015 年以来、地域との協働の中で、高校生たちは そうした経験をいくつか積み重ねてきた。
この 1 年を例にあげると、以下の通り、地域連携に基づく活動を行ってきた。

・3 月　富加町による歴史漫画「斎藤新五利治」発刊
　　歴史漫画発刊記念シンポジウム開催
・5 月 「関の遺跡めぐり」関市・関高校主催
・7 月 「刃物フェス in 石器時代」関市・関市観光協会・関高校主催
・8・9 月　津保城石垣測量調査 関市・富加町 （下写真）
・12 月 「探ろう！岐阜の歴史」関市・関市観光協会・関高校主催

今後の課題　～授業と部活動の連動～

授業改善と部活動。本来は別種の活動をひとつの原稿の中で論じてきたが、今、このふたつがつながろうとしている。
授業でも活用できる郷土史の教材を、生徒自身、すなわち地域研究部の活動の中で作れないかとの構想が、部内で持ち上がりつつある。
集落遺跡や古墳、寺院や官衙、中世にさかのぼる建築遺構や仏像、戦国期の山城、近世の城下町、刀剣や和紙を代表とする伝統産業、戦時中の特攻飛行場や軍需工場など、本校の立地する関市とその隣接地域には、注目すべき歴史遺産が数多く存在する。今後、こうした歴史遺産に加え、合戦や領主支配、土地開発や産業振興、一揆などの歴史上の出来事を、わかりやすく伝える手段を模索していきたい。

【追記１】地域研究部の活動に関しては、『岐阜県立関高等学校地域研究部報告』第 1～8 号を参照されたい（高校公式ウェブサイトに掲載）。

【追記２】本校は、2023 年 11 月 18 日、東京都立大学で行われたシンポジウム「歴史教育の現状と課題　～歴史総合を手掛かりに～」において発表した内容をもとに執筆した原稿である。